メリーゴーランド

夕焼けの回転木馬

眉村 卓

角川文庫

夕焼けの回転木馬（メリーゴーランド）

眉村卓（まゆむら たく）

角川文庫 6398

昭和六十一年四月十五日　初版発行

発行者——角川春樹
発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二—十三—三
電話　編集部(〇三)二三八—八四五一
　　営業部(〇三)二三八—八五二一
〒一〇二　振替東京③一九五二〇八
印刷所——大日本印刷　製本所——本間製本
装幀者——杉浦康平
落丁・乱丁本はお取替えいたします。
定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan

ISBN4-04-135746-2　C0193

夕焼けの回転木馬（メリーゴーランド）

眉村卓

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

目次

第1章 五
第2章 一四
第3章 二七
第4章 四六
第5章 八六
第6章 一〇五
第7章 一四〇
第8章 一五一
第9章 一九四
第10章 二四八
第11章 二八五
第12章 三四二

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第13章 三五一
第14章 三七一
あとがき 三八三

第1章

子供のころ、よくアテモンを作った。アテモンとは、多分――というより疑いもなく、当て物から来ているのだろう。しかし手元の小さな辞典によれば、当て物とは、かくしているものを言いあてること、とか、懸賞、とか説明がなされている。

ぼくが作ったアテモンは、この説明の範囲に入らないこともないが、だいぶ意味合いが違う。それにもっと具体的で、もっと馬鹿馬鹿(ばかばか)しい代物(しろもの)だ。

簡単にいえば、アテモンとは、はば六センチか七センチの紙をつないで長くしたものに、線を何本も描き、どの線を選んで進むかで、失敗になるかゴールに到着するかというものである。もちろんこれをそのままにしておいては結果は丸見えだから、巻物(まきもの)のようにしておき、相手が指で押えて進むぶんだけ開いて行くわけだ。

――と、述べてくると、なんだあれかと頷(うなず)く人も多いのではあるまいか。そして、これにはしかるべき名称もついているのに違いないが……ぼくは知らない。

考えてみると、子供の時分のぼくたちは、ひとつひとつの遊びに対して、近所の子供たちの間で通用する呼びかた、いわば子供の俗語を使用していた場合が多かったようだ。カン蹴(け)

りとか探偵ごっこなどは、こまかいルールに差があっても、ほぼ全国的に共通した遊びだろうが、そうではないものがいくつもあった。たとえばパラパラであり、さらにはチダカッサである。

パラパラとぼくたちが称したのは、つまり原始的映画である。単語カードか何かに、少しずつことなる絵を描いて行き、指でパラパラと弾きながら送ると、絵が動くわけだ。となると、映画というよりアニメーションと表現するほうが、正確かも知れない。このひとコマひとコマを綿密に、ときには色まで塗って仕上げれば、まことに豪華な超短編色彩アニメになる。もちろん、はじめからこんな高級なパラパラを作るのは、素人には無理だ。はじめのうちは円形の頭部と三角形の体、線だけの手足――という、ごく幼稚な主人公にしなければならない。そんな姿でも、スムーズに動くようになるためには、年期が要る。修業には、単語カードというような高級・高価な材料は使えない。従って表紙のやわらかな本の頁の隅を利用し、いろいろ作ってみるのだ。一冊の本で、左から右へと眺めて行くものが、上部と中ほどと下部。次には本を裏返してやはり三か所を使うと、これで六つのパラパラができる。本をそんなことに使うとはけしからん、と、文句をつけられるのを覚悟での作業だけれども……修業に夢中のぼくはいくら叱られ文句をいわれてもやめなかった。たまたま家に何度も読み返してほとんど暗記した子供のための全集があったので、その数十冊を、ことごとくパラパラのカンバスにした。これだけやっていると、腕も上達する。初期は上下左右へ動かすことしかできなかったものが、こっちへ突進して来たり、主人公は動かず背景が流れたり、顔

が正面から横向きになりつつ表情が変化したり――ということも、可能になってきた。そうした技術を駆使して、買ってきた単語カードにていねいに描き込んでゆくのである。現在のようにアニメが当り前の時代では、そんなアニメの真似ごとをして何が面白いのかと笑われるだろうが……ぼくは本気で作品を仕上げているつもりだったのだ。

孤独な作業ながら、作りあげたものを他人が見て感嘆するのを想像しつつ……真剣に描いたのである。

孤独といえば、チダカッサは、もっと孤独だった。

そもそもが、チダカッサなる名称が、ぼくの創案なのだ。パラパラの場合はまだ言葉としての力を持つ……すくなくとも遊び仲間たちに何のことかわかるけれども、チダカッサとなると、もういけない。この名称は、ぼく以外のごく特定の少数に対してしか、意味をなさないのである。実のところ、この作り方は小さいころに誰かに教えられたので、そのときは、

「あの、ぱっと立つ奴」

と、呼ばれていた。

だが、仲間うちではそれでいいとしても、よそへ行って、あの、ぱっと立つ奴、では、どうにもならない。それで勝手にチダカッサと名づけたのだ。しかも、だいぶのちになってからである。

いや。

ぼくは今ここで、子供が自分たちの遊びを俗語で呼ぶという話をしているはずだった。そ

れなのに、後年になって命名したその名称を持ち出すのは、文章の脈絡がつかないことになる。

だが……もうここまで来てしまったのだから、仕方がない。このままつづけるとしよう。とにかく、まだぼくは、そのチダカッサが何であるのかさえ、述べていないのだ。このままでは読む人が忘れものをしたような気になるだろうし、こちらも中途半端である。

チダカッサ。

まず、正方形の紙を用意する。

対角線に沿って折り、開く。

するとそこには、斜めに一本折り目の入った正方形の紙があるはずだ。当り前の話である。

この折り目を、基線とする。

待て。

もっと正確に説明しなければ、あとでいいかたに窮してしまうに違いない。だからこまかくやろう。つまり……正方形の各頂点をA、B、C、Dとし、折り目はACとする。

これでよし。

次にABをACに合わせ、ADをこれもACに合わせて折る。凧(たこ)みたいな四辺形になったであろうか。いいかたを替えれば、B、D両点は合致し、ACとの直交線が作られているわけだ。この直交線の左端をB′、右端をD′としよう。

次に、B′とD′を結ぶ線を谷折りにし、C点をACの線に重ねる。これで、底辺がやや短い

二等辺三角形になる。

このあと、実際にごらんに入れれば何でもないのだが、文章にするとややこしい。それでもあえて書くと……さっきのB′とD′を結ぶ線の中点をOとして、B′OをAOに、D′OをAOに合わせる。これまでの折りかたは力を入れてぴしっとしなければならないけれども、今回はあまり強く折り過ぎても、弱過ぎてもいけない。非常に微妙なところなのだ。

最後に、AOを谷折りにして、外から二本の指でつまむ。このAOの谷折りはさらに微妙であって、熟練を要する。

こうして用意が整ったら、ふたつ折りにしたこの奇妙な物体を、AB′、AD′のところをテーブルに合わせて置く。別にテーブルでなくても、平たい、すべすべしたところならどこでもいいのだが……置いて、指を離す。

ふたつ折りになったこの変な物体は、じわじわと開いて行き、うまくすれば、そこでぴょこんと逆立ちするはずだ。

一回や二回では、おそらく成功しないだろう。

何十回もテストし、そのたびに折り目の強弱を加減しなければ、立たない。

いくらやっても駄目なのは、折り方を失敗したのだから、あたらしい紙で作り直すべきである。

これが一枚めか二枚めで、二、三度の調整で六十パーセント以上の成功率を保持するようになると、初段級といっていい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

あとは、的確な調整と、いかに正確に迅速に立つか、なのだ。

もちろん、こんな技術を習得しても、何の役にも立たない。せいぜいが、同じ趣味を有する相手と、対戦するくらいのものだ。いくつかこの物体をそろえてチームを作り、点取り方式なり勝ち抜き方式なりで、勝負をするのである。だがまあ、こんな趣味の人間はあまりいないし、いたとしても、こちらがベテランの域に達しているから、多分、試合にはなるまい。ぼくの一方的勝利に終るはずである。

だから、ひとりで遊ぶことになる。

たくさん作って、一対一で勝敗を決し、順位を定め、A級B級などと組分けをして……もちろんそうなるとひとつひとつを識別するために名前をつけ、さまざまな色とデザインをほどこし……各選手の栄枯盛衰をグラフにするのだ。

それも、他人様に誇らしげに見せる所業とはいいがたいので、たいてい深夜に机の上で行うことになる。

全くあほらしい、つまらない、無益なゲームであると、ぼく自身も承知しているけれども……そういうしだいなのだ。

だが、これだけ念入りにやっていると、どうしてもこの奇妙な物体に名前をつけなければならない。正しい名称は知らないし、あの、ぱっと立つ奴、では間が抜けている。スマートな名をつけようと、ぼくは考えた。

これは、逆立ちするのである。

サカダチなのだ。
これをひっくり返すと、チダカサになる。それをローマ字で書いて、ちょっと手を加えると、CHIDAKASSA。
それで、チダカッサなのだ。
……。
アテモンの話に戻らなければならない。
このアテモンは、ぼくが小さいころには、一文菓子屋で売っていた。一文菓子屋とはぼくらがそう呼んでいたのであって、駄菓子屋のことである。
一文菓子屋のアテモンは、わりに単純であった。
六つか七つの線があって、その起点に線の数だけ自転車やら飛行機、ときには探険隊の服装の人物が描かれていたりする。巻いてあるのを開きながら線の上をたどって行くと、自動車レースの場合ならパンクとか衝突の絵が出てくれば、それでおしまいというわけなのだ。正しい線を選ぶと最後まで行けて、優勝カップの絵にたどりつくのである。
しかしこれでは、あまりにもあっけないとぼくは思った。
もっと長尺の、もっと複雑なのを、自分で作ることにしたのだ。
線は途中で何度も分岐し、片っ端からおしまいになる。やっと一本だけ残ってもまた枝分れして行く――というものを作った。もっともそれだけではいかにも単調なので、いくつものパートを設け、先へ行くほど色をたくさん使い、模様を描いたりする。終点あたりは花野

の中を進むというようにして……それは相手がそこまで行きつかなければ、決して見せないという——手のこんだアテモンを作製したのであった。

ただ、ぼくは自作のアテモンを、あまり長い間保持していたことはない。うまく出来ると、友達が欲しがるものだから、進呈するのがつねであった。そしてまた新作に挑戦するのである。

どうやらぼくはこのアテモンに、人間の一生を重ねていた気味がある。こんなことに凝っていたのが戦中と戦後間もない時期だったせいで、人なんていつ死ぬかわからないと感じており、その気分をアテモンに託していたようなのだ。

後年になっても、ぼくはときたま、アテモンを作った。

今でも暇があると、作ってみようかなと思ったりする。

このアテモンだが……あるとき、友達のひとりがいった。

「それ、ゴールから逆に行ったら、必ずスタートまで戻れるわけだろう？」

いわれてみれば、その通りで……ぼくは頭の中が変になったような気がした。

その友達は、別のことも口にした。大体が、このアテモンを相手にやらせるときは、巻いてあるのをどんどん開いてゆき、アウトになるとそこで止めて巻き直すのであるが、相手が負けん気の強い奴だと、それを何度も何度も繰り返させる。繰り返すうちに、どこでどう行けばアウトにならずに済むかを覚えてしまい、ついにはゴールの、綺麗に描いたところへ到達してしまうのだ。そいつも、例によって何回も挑戦しているうちに、ふと、文句をつけた

のである。

「こんなに片っ端からアウトになるのなら、アウトの中にはこれと違う別のアテモンに進めるものがあったって、いいんじゃないか？　そういう、何個も一緒にしたアテモンは出来ないのか？」

そんなことは技術的に不可能だった。しかし、そういうアテモンがあってもいいな、と、ぼくが思ったのも事実である。

第2章

〝死人の宴〟という本が目についた。

著者の名は知らない。

人差し指をかけて棚から斜めに引き出すと、箱に入った立派なつくりである。中身を見られるのを拒否しているようでもあった。

中原力哉は、その本を元に戻した。

これが箱に入っていたから、まあよかったのだ、と、彼は思った。うっかり中を見たりしたら、不吉な文字や文章が目に飛び込んで来ていたかもしれない。そしてその内容に引きずり込まれて、何日か、異様な心理状態になったかもわからないのである。

それにしても、どうしてこんな表題に惹かれるのだろう。惹かれて、おそれているのはなぜであろう。

多分、自分にはそうした傾斜ができてしまっているのだ。

こういう神経がおのれの弱気から来ているのを、中原は悟っていた。ここしばらく、理由のわからぬ腹痛や胸痛が二、三日つづいては消える——ということが多い。治療をおこたっている歯も痛かった。肉体が衰えてきたせいで、それらをもう抑え込めなくなっているのだ。

ともすれば弱気になるのも致し方ないのであった。

中原はそれ以上書店の中をうろつくのをやめて、外へ出た。

晩秋の夕闇は、もはやどこかへ行って、すっかり夜である。異様なまでに広い歩道に商店の灯が散乱して、街路樹はざわつきながら車の群れのヘッドライトに浮き出されていた。

歩きだす。

目的地は決まっていた。目的地というほどのものではないが……会社からの帰途にしばしば寄る赤提灯に、行ってみるつもりなのだ。はじめから何となくそのつもりだったので、途中本屋へ立ち寄り、出たときには確実にその気になっていたのである。

もちろん、赤提灯で酒を飲めば愉快になるという保証はない。だが、何もせずにひとり住まいのマンションへ帰るよりは、ずっとましには相違なかった。客の顔ぶれしだいでは、面白い時間を過ごせるかも知れない――とのかすかな期待が彼の歩行を助けているばかりである。

梅田新道の交差点に来た中原は、右手の巨大な市街地改造ビルに沿って右折した。まっすぐ道路を横断しようにも、横断歩道はなく、代りに地下道が作られているので……階段を降りたりあがったりするくらいなら、もう少し先にある横断歩道を渡るほうが楽なのだ。

そうして群衆と共に歩いていると、彼は、ずっと前にもこんな感じでここを進んでいたことを思い出す。むろん周囲の風景もことなっているし、当時は学生服姿であった。あれからもう三十年近い年月が経っているのに、不意に自分が、まだ学生のように思えてくるのだっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com